

コロナとともに生きる私の日常

村上 可奈 (MURAKAMI Kana)

明海大学歯学部 d0120-0105@dent.meikai.ac.jp)

新たな大学生活

新型コロナウイルスの感染が世界に拡大し、1年が経とうとしています。

毎日、ニュースで感染者数が報道される度に怖い気持ちになります。電車に乗り、つり革に触れるだけでもウイルスが気になったり、図書館で本を手にとるときに一瞬、躊躇したりと不安はつきません。

特に学業面においては大きな変化がありました。登校するのが普通のことでしたが、ウェブ上で講義を受けるスタイルが当たり前の時代になったことです。このように、ネットワークを介してコミュニケーションをとることは便利ですが、直接会ってお互いの顔を見ながら話をする機会がすっかり減ってしまいました。祖父母の見舞にもなかなか行けないことが残念です。

昨年、入学当初の4月からは大学で、新しい友人、先生方、先輩方と人との輪を広げていきたいと期待を膨らませていましたが、そのようなスタートではありませんでした。講義がどのように進められていくのかわかるまでの待機期間は、実際の日数より長かったように思います。その間は、行き場のないもどかしさに苛立ち、母に

あたってしまうこともありました。さらに屋外での活動が制限されていたことも、ストレスの発散の仕方がわからず冷静さを欠く原因になったと思います。

「なぜコロナの流行が今なの？どこからやってきて、いつの間に人々の生活がこんなに左右されるようになってしまったの？これからどうになってしまうの？」という思いが常に心にありました。

新しい講義のあり方

4月以降、大学の講義はウェブ上のみで行われていましたが、夏に差し掛かる頃ようやく初めての登校日が決まりました。やっとこの時が来た、と安心しました。でも、思い描いていたものとは違う始まりに対する違和感や新しい生活への期待、今後のコロナ感染はどうなっていくのかという不安が入り混じった、複雑な気持ちで登校初日を迎えました。

現在は、登校する日と在宅でのウェブ講義が並行して行われています。実習の時は、全員登校することになっています。顕微鏡を用いて実際に手を動かす実習は楽しく、今後も実習登校

日が減らないで欲しいと思っています。

一方、在宅でのウェブ講義ですが、画期的なシステムがあるおかげで、課題提出や質問が円滑に行われており、対面授業とほぼ質は変わりません。講義の動画がいつでも見られることは、復習の時に役立ちます。ウェブ上でも便利なアプリケーションのおかげで共同課題を不自由なく行うことが可能になっています。

心にゆとりを

今は、新たな学生生活の様式にも慣れてきましたが、残念なこともあります。それは、未だに部活動や課外活動に参加できないことです。例えば、運動系の部活に入って合宿に行き、たくさん体を動かしたいと思っても現実的ではありません。友人と学校帰りに一緒に勉強をすることも、休日に息抜きをしながら映画館に行くことも、アルバイトをすることも難しい状況は変わりません。

しかしその反面、自宅で過ごす時間が増えた分、生活のリズムが正しくなったという良い面もありました。料理を楽しんだり、食生活に気を配る余裕も生まれました。ゆっくり湯船に浸かったり、

YouTube 動画を見ていつでも運動できます。時間の余裕が生まれたおかげで、自分の身体を労わる方法を見つけられるようにもなりました。

また、初めは少し窮屈に感じていたマスクをつけての生活も今では素材や柄を楽しむ余裕があります。大学の食堂や外出先でも座席に仕切りが立てられ、感染予防対策がなされています。これまでの日常とは大きく変わった風景ですが、不思議なもので慣れてくると不便さを感じることもなく、世の中がより清潔になっていると実感します。

このようにコロナ禍の生活に慣れたとしても、感染拡大は止まっていないことへの危機感は持ち合わせていなければなりません。

世界に目を向けてみると、コロナ政策によって人々が暴動を起こす国もあります。日本ではあまりそのようなことは起きませんが、国民性の違いとも言われますが、周りを気遣うあまり、心の中を胸に閉じ込めて過ごし

ている人が多いからかもしれません。

ヴィクトル・マルティン

私たちの世代はコロナウイルスという、未曾有の感染症のおかげでこれまでと全く違う日常を過ごすことになりましたが、ここでヴィクトル・マルティンのことについて記したいと思います。私は現在の日常に追われて行き詰まりそうになった時、ふと、約2年前に報道されたあるニュースのことを思い出します。

それはペルー北部モチェにて、ある夜、街灯の下で男の子がノートを広げて勉強している様子が防犯カメラに記録されており、地元の警察官が発見したという内容でした。その映像が今も私の脳裏に焼き付いています。

その男の子の自宅には電気がなく、蠟燭の灯りだけではおかしくなってしまいそうなため、外の方がまだマシという理由で、街灯の下で宿題をしていたとのことでした。

その後、彼の家には電気が通る

よう設備されたそうですが、今もその映像を思い出すと、ヴィクトルくんの本当に勉強がしたい、というその素直な気持ちに目頭が熱くなります。

そしてその光景は、私が15歳の時にバングラデシュのスラム街を訪れた時に感じた気持ちを同時に思い出させてくれました。NGO 団体のスタディ ツアーに参加し途上国を訪れ、その現実を目の当たりにした時、将来は人の役に立てる生き方をしたいと心から思いました。

未来を見つめて

例えどんなに困難な状況下に置かれても、時はすべての人間に平等に与えられています。今日1日を精一杯頑張った。そう言えるように日々の講義とプライベートを充実させて過ごしたいと思っています。今、自分の置かれている環境へ感謝し、初心を忘れずに、歯学部で着実に学んでいきたい。そして近い将来、社会に還元できるよう、一生懸命に新しい日常の世界を乗り越えていこうと思います。